

山口県立山口博物館所蔵の植物標本(明治時代 2)

杉 江 喜 寿

Botanical specimens in the collection off the Yamaguchi Prefectural Museum (Meiji era 2)

Yoshihisa SUGIE

山口県立山口博物館研究報告

第50号(2024年3月)別刷

Reprinted from

BULLETIN OF THE YAMAGUCHI MUSEUM

No.50 (March 2024)



## 山口県立山口博物館所蔵の植物標本（明治時代 2）

杉江 喜寿<sup>1)</sup>

Botanical specimens in the collection off the Yamaguchi Prefectural Museum (Meiji era 2)

Yoshihisa SUGIE

### 1 はじめに

当館所蔵の県内採集・県外採集の標本及び当館所蔵ではないが県内で採集された「最古級」と思われる植物標本については、前稿（山口県立山口博物館所蔵の植物標本（明治時代）.山口県立山口博物館研究報告第49号.2023）で報告している。前稿では種子植物の標本のための調査であったが、本稿ではその続編として、新たにシダ植物の標本調査を加え、当館所蔵の明治時代の県内採集、県外採集の標本について追加報告する。

当館や当館の植物収蔵資料についてはすでに前稿でも記載しているので一部重複するが、概略を以下に記す。

当館は、1912（明治45年）に開館し、2024年（令和6年）に開館112周年になる県立の総合博物館で、7分野で計36万点以上の資料を収蔵している。そのうちの21万点以上は植物のさく葉標本（以下、植物標本）である。実に全体の収蔵資料数の約60%を占めている。2021年（令和3年）には、新型コロナ対策も兼ねて当館公式サイト上に「バーチャル収蔵庫」という新たな収蔵資料公開の場を開設することになったが、その際にそれらの希少種以外にも歴史ある当館ならではの資料として、明治時代の標本の画像を掲載することにした。

昨年度（2022年度）時点では、当館でデータ化した標本一覧に記録として残っている最も古いものは1887年のものと報告したが、今年度新たにシダ植物のデータを確認したところそれより1年前の1886年（明治19年）の標本を所蔵していることが確認できた。

2022年度に確認した、当館所蔵の県内外で採集した最古級の植物標本5点は、当館サイトに2022年度末よりすでに公開済みであり、それらは前稿で報告している。本稿ではこの5点を除いた、日本や山口県の植物研究の黎明期に作製された当館所蔵の植物標本を報告する。ただし全体のうち、データ化しているものはまだ約半数程度であり、以下に記す資料は、すべて2023年12月末現在の確認済みのものである。

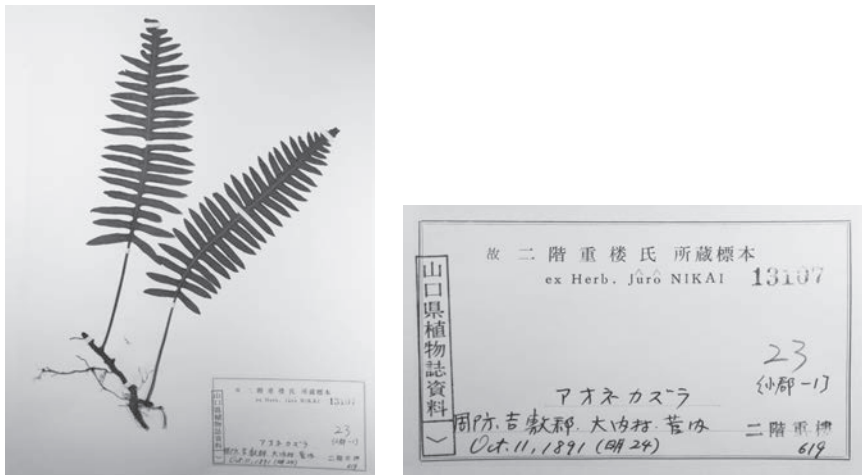
---

1) 山口県立山口博物館（植物）

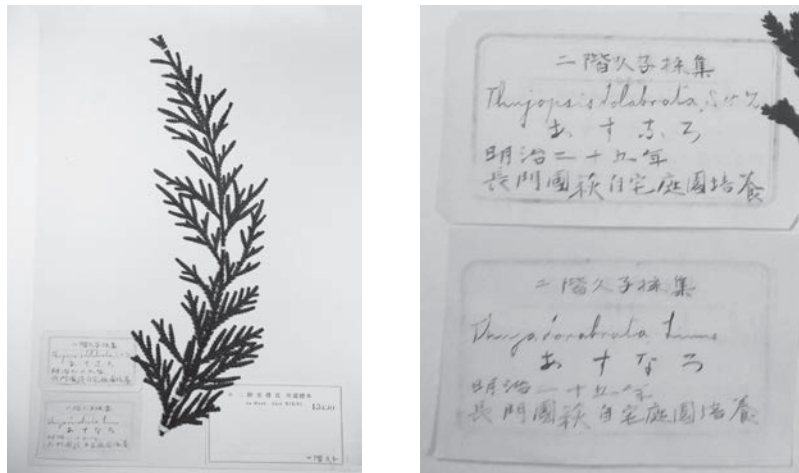
## 2 当館所蔵の明治時代の植物標本について

### (1) 「山口県内の採集」で、明治時代（1890年代）の標本（当館所蔵）

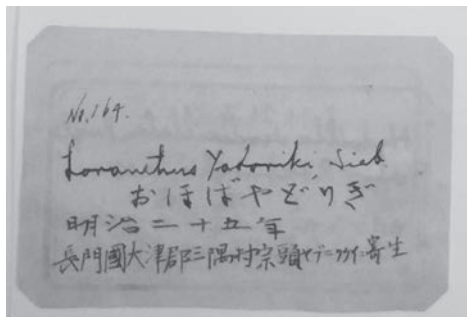
山口県内採集の植物標本のうち、当館で所蔵している最古級の植物標本として現時点で確認できているものは、前稿で示した二階重樓による「オオイヌノフグリ 1890年（明治23年）」である。今回確認したシダ植物の標本データから、その次に古いと思われる同じく二階重樓による1891年（明治24年）の標本「アオネカズラ 1891年（明治34年）」が確認できた（画像1・2）。その標本と翌年1892年（明治25年）の種子植物の標本（画像3～18）、計9点を以下に示す。



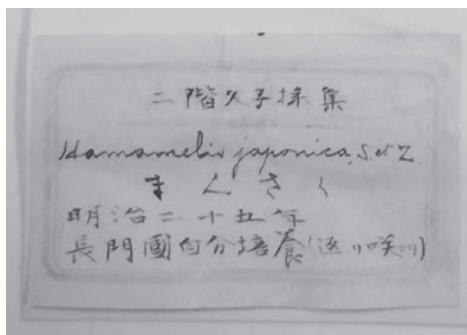
画像1・2 アオネカズラ（1891年（明治24年）山口県 二階重樓）



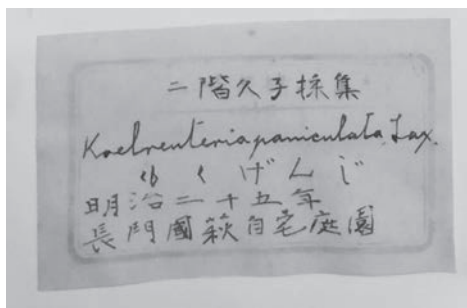
画像3・4 アスナロ（1892年（明治25年）山口県 二階久子）



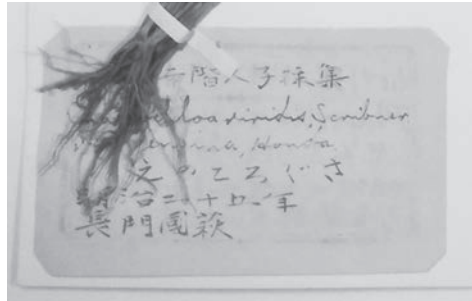
画像5・6 オオバヤドリギ (1892年 (明治25年) 山口県 二階重楼)



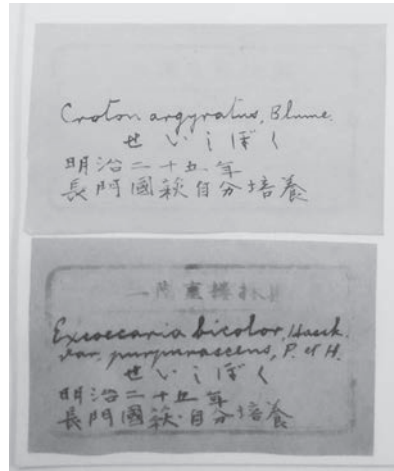
画像7・8 マンサク (1892年 (明治25年) 山口県 二階久子)



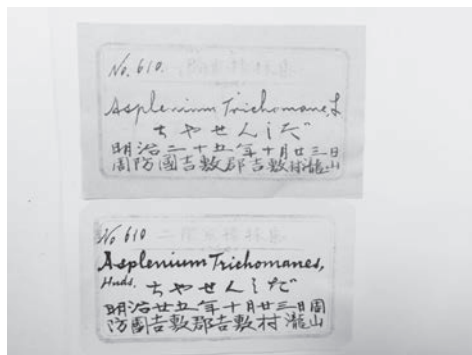
画像9・10 モクゲンジ (1892年 (明治25年) 山口県 二階久子)



画像11・12 エノコログサ (1892年 (明治25年) 山口県 二階久子)



画像13・14 セイシボク (1892年 (明治25年) 山口県 二階重楼)



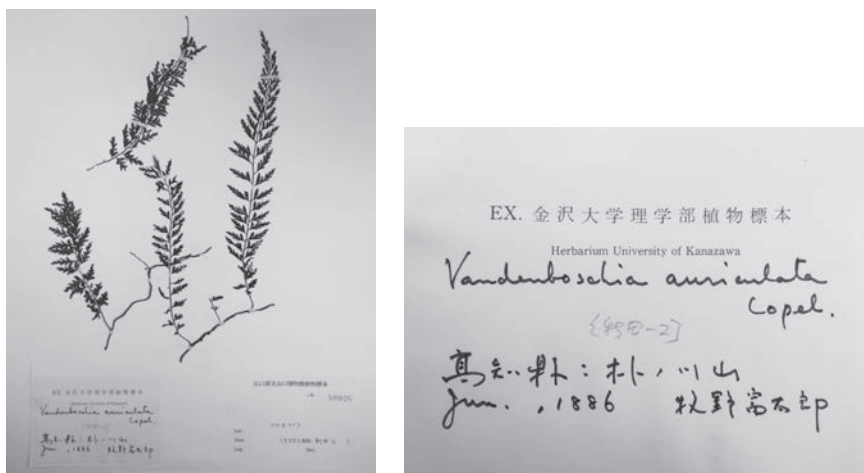
画像15・16 チャセンシダ (1892年 (明治25年) 山口県 二階重楼)



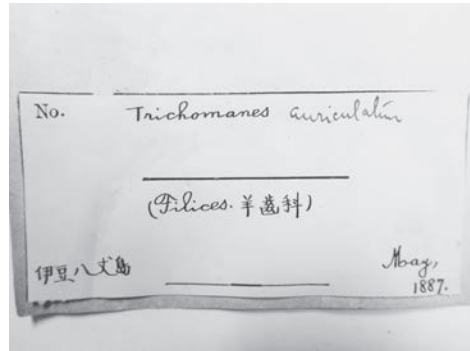
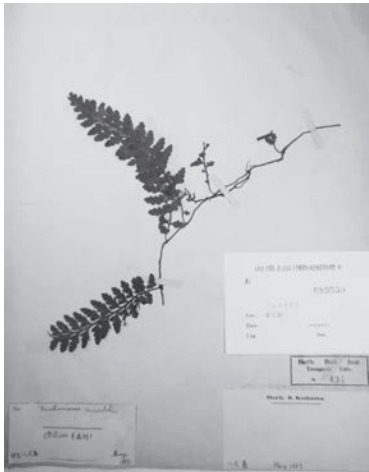
画像17・18 イブキシダ（1892年（明治25年）山口県 二階重楼）

## (2) 「山口県外採集」で明治時代の標本（当館所蔵）

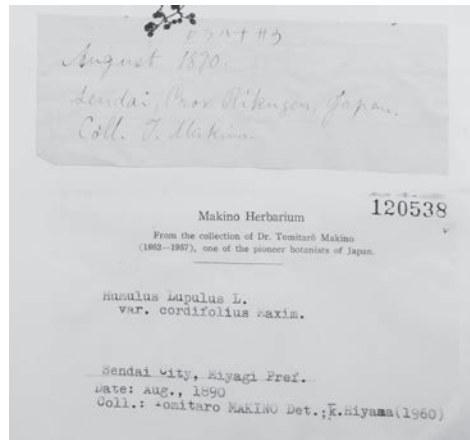
昨年度は種子植物の標本のみ調査し、「山口県外の採集で、現在当館で所蔵している最古級の植物標本は、「ツルマメ 1887年（明治20年）」としていたが、今年度シダ植物の標本を確認したところ、これを1年遡る1886年（明治19年）の標本「ツルホラゴケ」が収蔵されていることが確認できた（画像19・20）。しかもこれには採集者「牧野富太郎」の記載もあり、採集者の記載があるものとしては、同じく前稿で示した牧野富太郎による「タカネハンショウヅル 1888年（明治21年）」と「ミズキカシグサ 1888年（明治21年）」を2年遡るものである。この「ツルホラゴケ」は牧野富太郎博士（1862年生まれ）がまだ24歳のときに作製したものであり、そのことも含めて貴重な資料である。本稿ではこの標本と1887年（明治20年）、1890年（明治23年）の標本（画像21～26）を示す。



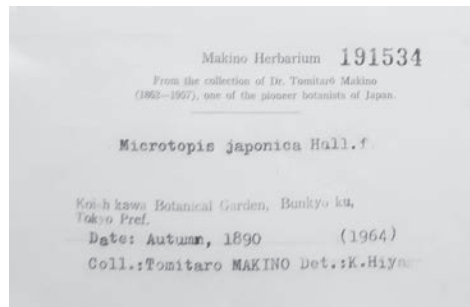
画像19・20 ツルホラゴケ（1886年（明治19年）6月 高知県 牧野富太郎）



画像21・22 ツルホラゴケ (1887年 (明治20) 5月 東京都 採集者不明)



画像23・24 カラハナソウ (1890年 (明治23年) 8月 宮城県 牧野富太郎)



画像25・26 モクレイシ (1890年 (明治23年) 秋 東京都 牧野富太郎)



#### 4 おわりに

本稿で報告した植物標本も、今から130年以上も前のものであるが、やはりこれらの標本の状態そのものが良好なだけでなく、その質も極めて高いことに改めて驚かされる。当館では、わかっているだけでも1,300を超える牧野富太郎博士作製の標本を収蔵しており、当時から植物調査が全国規模で行われていただけでなく、標本の交換、交流やお互いの地域や収蔵施設の訪問などが積極的に実施されていた様子を窺い知ることができる。またこれらの標本とともに、その当時の標本作製に使われた新聞紙も残されており、当時の世相も読み取ることができる貴重な資料となっている。当時は現在とは比べ物にならない手間と費用をかけて植物調査を実施していたことは間違いなく、一世紀以上の時を超えて今に残された標本を含む資料を見ると、感慨深いものがある。

さらに、今回の調査をとおして、当館だけでも数多くの標本を残している牧野富太郎博士の精力的な調査や研究活動について知ることができ、改めてその植物愛や植物研究に対する情熱を感じることができた。先日、光市の虹ヶ浜で博士が命名した「ニジガハマギク」の開花状況を現地で確認する機会を得た。このニジガハマギクは、博士たちの思いを受け継いで、現在にいたるまで地域や学校による手厚い保護のもとで守り続けられてきたものである。牧野富太郎博士の作製したこの「ニジガハマギク（1921年（大正10年） 光市虹ヶ浜）」の標本1点が当館に保存されており、100年の時を超えてこうしてニジガハマギクの現在の姿と当時の姿とを比べてみることも博士を始めとする当時の植物学者たちの努力の賜物である。

当館では、2021年度末からこうした貴重な標本をほんの一部ではあるが「バーチャル収蔵庫」としてWEB上（当館のWEBページ内）で公開できるようになり、今後も随時バーチャルでの公開を増やしていく予定である。これにより長年収蔵庫の中に保管され、関係者以外目にするができなかった標本などの当館の貴重な収蔵資料を多くの人に見ていただくことができるようになった。

しかし、これはこれで画期的なことではあるが、やはり博物館としては実物を展示して多くの人に直接観覧していただきたいという思いは常にある。そのため、2024年（令和6年）4月25日から6月16日まで開催する予定の植物分野の企画展「やまぐち植物さんぽ【I】～植物って、すごい、おもしろい、ふしぎ！～」において、山口県内各地の特徴的な植物の紹介とともに期間限定で前稿と本稿で報告した標本のうち一部を展示室で展示する準備をしているところである。また、併せてWEB上の「バーチャル収蔵庫」に追加で公開する予定もある。

博物館においては常に資料保存の意義と展示などの公開の意義のバランスを問われる日々であり、当館の施設・設備では正直なところ資料によっては実物の展示はなかなか厳しいところもあるが、今回のような明治時代の植物標本は、植物分野への興味付けとしては欠かせない資料の一つと考えており、これを機会に今後もこのような資料の活用を検討し、進めていきたい。

#### 5 追記

最後に報告であるが、当館では植物サポーターのみなさんの協力により、収蔵庫に長期保管されていた植物標本のデータ入力や整理を地道に続けている。この活動により、30年以上前に

活動を休止した県内他施設からまとめて寄贈され、長年ほぼ手付かずで当館に保管されてきた標本の調査に入ったところ、この稿の締め切り直前の2024年1月になって、これらの中に二階重楼（1859～1932）や中井猛之進（1882～1952）などの山口県を代表する植物研究者たちの貴重な標本が多数が含まれていることが改めて確認できた。その数は数百点に上り、中には学生が授業の中で標本作製の練習として作ったようなものもあるが、多くは明治時代や大正時代など植物研究黎明期の研究者の標本のようなものである。これらの標本の多くは、寄贈されるまでの保存状態が悪く、また作製当時の薄い台紙のままグラシン紙もないため、箱から取り出すだけでも標本が痛みやすく、調査をするにもまず事前に台紙の補強などを実施する必要がある。そのため、これらの標本の内容を整理するにはかなりの時間を要することになると思われるが、これから植物サポーターのみなさんの協力を得ながら標本の保全作業及び整理を慎重に進め、情報がまとまり次第発信していく予定である。これにより、山口県を中心として植物研究の黎明期から数十年前までの貴重な資料が追加でき、本県のみならず全国の植物研究の新たな資料として活用できることを期待している。

## 6 参考・引用文献

- 岡 国夫ほか（編）. 1972. 山口県植物誌. 山口県植物誌刊行会. 山口  
杉江 喜寿. 2023.3 「山口県立山口博物館所蔵の植物標本（明治時代）」. 山口県立山口博物館研究報告.Vol 49 . pp.17 - 24. 山口県立山口博物館. 山口